

★ Afrasia NEWSLETTER

アフラシア ニュースレター

発行：龍谷大学アフラシア平和開発研究センター

<http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>

巻頭インタビュー ケント新センター長とカルロス新事務局長に聞く ポーリンケント新アフラシア平和開発研究センター長に聞く

アフラシア・センターは2008年4月から4年目を迎えました。今回のニュースレター（第6号）では、アフラシアのこれまでの3年間の進捗状況と今後について、新センター長のポーリンケント先生（龍谷大学国際文化学部教授）にお話を聞きました。

（聞き手：PD アイスン ウヤル）

——ケント先生は、今年3月までの3年間、アフラシアの事務局長を担当されていました。この3年間の進捗状況に関してどう思いますか。

ケント：（学術フロンティア構想）調書は、長崎先生、河村先生、中村先生、落合先生など、いろいろな先生と連絡し合いながら作成いたしました。その調書の内容は、よく出来た内容だったと思います。アフラシアは何もないところからスタートしました。この3年間でいろいろな研究会やイベントなどが出来るようになったこと、それは長崎先生を中心として種をまいたものに花が咲いた、ということだと思います。

最初の1-2年間は、紛争解決という問題設定において、それぞれの班に何ができるのか、議論が集中しました。この意味で、それぞれの班の研究テーマで開催した国際シンポジウムは、非常に大切な働きをもったものでした。3年目に作成した中間報告書（研究進捗状況報告書、2007年に文部科学省へ提出）は、これまでのアフラシアの研究・教育活動を総括するという意味で、大変いい機会でした。

また、この3年間で、若いスタッフのエネルギーをいつも感じてきました。そして、研究するためのよい環境が整ってきました。文部科学省の支援はもちろんのこと、龍谷大学の皆様、特にこのプロジェクトに関わった事務の方々の積極的な支援のお陰で、先生方も安心して研究することができます。

——アフラシアは2008年4月から4年目を迎えました。新体制となったアフラシアを紹介していただけませんか。

ケント：アフラシア発足の当初から、長崎先生を中心とした前体制は、3年後にアフラシア体制を次世代に継がせたい、と考えられておりました。

アフラシア・センターは、国際文化学部の若手研究者が多く所属しています。しかし、センター立ち上げ前には特に海外からの研究員の共同研究の機会が少なかった。そして、そういった研究者が、アフラシアのプロジェクトに参加出来るよう、組織を作っていくことが主旨の一つでした。このように、全学的なプロジェクトをおとして所属やキャンパスの違う研究者が紛争解決について討論できる場をアフラシアは提供するようになりました。アフラシアは各研究員と大学の研究により一層貢献できるように思ったのではと思います。

今回は、私は新しいセンター長になりましたが、女性のセンター長、女性のカルロス事務局長の体制は、ジェンダー問題が紛争の原因の一つであることを考えても、アフラシア・センターでのジェンダーバランスはよくとれていると思います。

さらに、落合先生が第4班の新班長となり、これは世代交代の一つ、これでアフリカ研究ももっと表にでて注目されると思います。また、1班は権五定先生、嵩満也先生と土佐弘之先生を新しいメンバーとして迎え、新しいPDRAスタッフも加えていただいたことで、組織はリニューアルしたとも言えます。

——アフラシアに関する新センター長としてのご意見をお伺いしてもよろしいでしょうか。

ケント：ここまでの業績を作るのは大変でした。それぞれの班は、自分たちが抱えている研究課題を明確にして、共同研究できる段階になりました。この環境を守りながら、さらに新しい方向へ行けるように、つまり2年先にもプロジェクトを継続できるようにしたいと思います。その際に鍵となるのは、このプロジェクトに対して、メンバー全員がどのような意義と価値を感じているか、です。それは、どれだけ元氣よく、楽しく研究を出来るかにかかっていると思います。それはまた、龍谷大学に有意義な貢献をすることになるでしょう。

——紛争解決に関する研究分野においてアフラシア的なアプローチとはどのようなものなのでしょうか。

ケント：これまでの紛争解決に関する研究では、西洋的なアプローチが多くとられてきました。でも、アフラシア的なアプローチというのは、非西洋の視点に立つ日本の研究者が、どのような紛争解決の提言を行えるか、と関連しています。つまり、日本の研究者は、アジアおよびアフリカを研究するにあたって、どのような見方ができるのか、です。もちろん、日本の観点からみるのは、一つのアプローチです。

以上の点を踏まえれば、アフラシア独自のアプローチが生まれるのではないかと思います。このアフラシア的アプローチが、次世代の役に立てたらいいと思っています。

——最後に、アフラシア・メンバー及びアフラシアに興味を持っていらっしゃる方々に一言お願いいたします。

ケント：積極的に楽しく、この研究プロジェクトに参加していただきたいと思います。



ポーリンケント・センター長 ▲

ケント先生に引き続いて、新事務局長に就任されましたカルロス先生にもインタビューいたしました。

——アフラシアのこれまでの3年間の進捗状況と今後について、どのようにお考えですか。

カルロス：これまでのシンポジウムや研究会等を通じて、アジアとアフリカにおける紛争のそれぞれの特徴がみえてきました。今後は、紛争解決におけるアジアとアフリカの共通点とは何か、この点を模索していくことが求められていると思います。

——先生はアフラシアのどのような点にご興味をもっているのでしょうか。

カルロス：(アジアとアフリカを組み合わせた造語である)「アフラシア」という言葉に惹かれました。私の関心は国際労働の送り出し地域としてのアジアとアフリカだからです。これまでの私の研究手法は、

計量的分析でした。今後は、文化的側面も取り入れて、移民を研究していきたいと考えています。

——紛争を非暴力的に解決するにあたって、文化の役割とはどのようなものなのでしょうか。

カルロス：文化を背負った移民は、マリアレイナルースD.カルロス事務局長▲紛争を起こす原因ともなりますが、同時に共生へと導きます。移民は(紛争と共生の)媒介なのです。共生という紛争予防を考えるにあたって、文化の役割は重要であると考えています。

(PD 佐藤史郎)



アフラシア新体制・新メンバーの紹介 (2008年4月～)

◆運営委員会

センター長：ポーリンケント氏 (本学国際文化学部教授)
事務局長：マリア レイナルース D. カルロス氏 (本学国際文化学部准教授)
4 班班長：落合 雄彦氏 (本学法学部教授)

◆1 班

権 五定氏 (本学国際文化学部教授) * 新研究員
専攻分野/教育学
嵩 満也氏 (本学国際文化学部教授) * 新研究員
専攻分野/哲学、宗教学
土佐 弘之氏 (神戸大学国際協力研究科教授) * 新研究員
専攻分野/国際関係論

◆2 班

小瀬 一氏 (本学経済学部教授) * 3 班から 2 班に所属変更
鈴木 智也氏 (関西大学経済学部准教授) * 本学から関西大学に所属変更

◆リサーチアシスタント

1 班：山川貴美代氏 (本学国際文化研究科博士課程単位取得退学)
3 班：松井 智子氏 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

◆事務

横江 千晶氏 * 瀬田

2008 年度公募研究員の紹介

◆1 班

戸塚 悦朗氏 (本学法科大学院教授)
「国連人権機構改革がアジア地域紛争解決に及ぼす影響に関する研究—軍性奴隷問題を焦点に—」

◆2 班

水野 敦子氏 (甲南大学経済学部非常勤講師)
「ミャンマー農村地域からの労働力国外流出と村落経済構造の変容に関する研究」

◆3 班

石塚 勝美氏 (共栄大学国際経営学部准教授)
「独立後の東ティモールにおける国家構築の問題点」

◆4 班

増田 和也氏 (京都大学大学院人間環境学研究科博士課程)
「インドネシアの森林地帯における相克と民主化・地方分権のなかでの新たな展開」

国際シンポジウム 特集 第3回 アフラシア国際シンポジウム開催



▲シンポジウム会場 (大宮学舎)

2008年2月23日-24日、龍谷大学大宮学舎清和館にて、アフラシア平和開発研究センターの第3回国際シンポジウム「悲鳴をあげる資源—アジア・アフリカにおける地域共同体の持続可能性 (Resources

under Stress: Sustainability of the Local Community in Asia and Africa)」が開催された。シンポジウムでは、アジア・アフリカ地域の農業、水、食糧、石油などの資源をめぐる紛争の解決方途を模索し、活発な議論が行われた。以下、各パネルでの報告と議論の概要を紹介したい。なお、詳細については、9月刊行予定の Proceedings of the Third Afrasian International Symposium (Afrasia Symposium Series 3) を参照されたい。

第3回アフラシア国際シンポジウム

悲鳴をあげる資源

—アジア・アフリカにおける地域共同体の持続可能性—

主 催：龍谷大学アフラシア平和開発研究センター
後 援：京都大学 G-COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」(東南アジア研究所)
会 場：龍谷大学大宮学舎清和館3階

現在のアジア・アフリカは、グローバル化の進展するなかで、経済成長しつつある地域と開発に乗り遅れた貧しく、紛争の頻発する地域とに両極分化しつつある。両者は密接に関係したものであり、本プロジェクトではその事象を総合的に研究し、紛争解決の方向性と日本の役割を見いだすことを目的とする。

第2班では、環境と資源に焦点をあてることによって、紛争に象徴される国家間の摩擦関係を規定する社会経済的要因のメカニズムの解明に取り組んでいる。本シンポジウムでは、環境と資源の関係がもっとも鮮明に現れる、土地利用に基づく農業を事例とすることによって、環境と資源と社会的緊張関係との相互規定関係を明らかにすることに取り組んだ。(シンポ主催責任者 河村能夫)

◆基調講演

「悲鳴をあげる土地・水資源

—稲集約栽培法 (SRI) が示唆するポストモダン農業の事例と可能性」



▲アップホフ氏

程の均一化、(2) 生産の大規模化、(3) 機械化による労働節約、(4) 化学化による安定的な生産拡大、に特徴付けられる。つまり、品種改良による生産能力の向上と、投入依存型の資本集約的農業の展開が求められてきた。

しかし、農業近代化の結果、農業生産の持続的な拡大が困難と

ノーマン・アップホフ氏は、農業近代化の反省から、農業生産のパラダイム転換の必要性を主張した。「緑の革命」に象徴される農業近代化は、科学技術の発展に基づく産業化を意味するものであり、(1) 生産過

なっている。アップホフ氏が主張したオルタナティブな農業生産は、土地生産性と水生産性を基軸とするものであった。その農業は、アジアで展開されている集約的な稲作有機農業に見られるように、稲・土壌・水・栄養などの管理を従来の品種改良型 (Genotype) から環境融和型 (Phenotype) へ転換したものである。すなわち、土地がおかれた環境に適応した形で稲・土壌・水を管理し、有機物の投入によって土壌の栄養素を安定させ、稲の持つ生命力を最大限に引き出し、集約的に稲を生産するシステムである。基調報告者は、この環境に適合した集約的な稲作有機農業をポストモダン農業のあり方として注目している。近代的農業の反省に基づいて、集約的な有機農業をオルタナティブなパラダイム転換として主張した点は、今後のアジア農業の発展方策を考える上で一考に値する。

(河村能夫)

◆セッション1

アジア・アフリカの紛争と資源問題

第1セッションでは、アジア・アフリカの紛争を、資源問題という切り口から分析する報告が行われた。

シャンムガラトナム氏は、内戦後の南部スーダンにおいて最重要政治課題となっている土地問題の歴史的背景と現状について論じた。従来スーダン政府は土地国有化政策を進めてきていたが、それに対し、スーダン内戦における反政府勢力スーダン人民解放運動とそれがももなった現・南部スーダン政府は共同体による土地保有システムを是認してきた。しかし同時に南部スーダン政府は戦後復興に向けて外資の導入をめざしており、石油資源等への投資を呼び込むためには土地私有システムの構築が求められてきている。南部スーダン政府は、人々の生活基盤の確保を最優先しつつ、各共同体との協議を進めるなどイニシアチブをとるべきだとシャンムガラトナム氏は指摘した。

高橋氏は、イラクにおけるクルド問題の背景のひとつに石油問題があると指摘し、その現在の情勢について分析した。2007年に提案されたイラク石油法案は、クルド地方政府に石油開発の権利を大幅に認めるものであるなどの理由から審議が難航しているが、クルド地方政府はすでに独自に諸外国の石油会社との油田開発契約を取

りかわし始めている。石油資源はイラクの戦後復興に寄与するだろうという甘い期待とは裏腹に、石油によってイラク分割 (クルディスタン独立) が引き起こされる可能性すら否定できないと高橋氏は指摘した。

ディスカッサントの平島氏は南アジア土地制度史研究の立場から、土地市場の発達の前提として土地の商品価値が法的に認められる必要があること、不平等な土地分配の是正は政策的になされるべきであること、などを指摘した。

(RA 石坂晋哉)



左から、平島氏、シャンムガラトナム氏、高橋氏 ▲

◆セッション2

東・東南アジアの農業システムにみられる紛争解決

第2セッションでは、東・東南アジアの農業システムの地域的・歴史的比較が行われた。

藤田氏の報告は、バングラデシュにおいて、日本のような小農社会の形成が進まなかった理由を解明するものであった。藤田氏は、中規模農地と農業労働者が多いバングラデシュの農業システムは、役牛使用に最適化された型であると結論づけた。中林氏の報告は、1920-30年代の日本経済転換期の日本の農業が、当時期待されたように市場原理を貫徹させる方向には向かわなかったのはなぜかを明らかにするものであった。中林氏によると、当時

の日本の小作たちが志向したのは、ハイリスク・ハイリターン of 市場経済ではなく家父長制のセーフティネットの仕組みを温存した福祉国家路線だったのである。田中氏の報告は、モンスーン・アジアの各地域の稲作の歴史的発展を「環境適応型技術」と「環境形成型技術」の組み合わせによって説明するものであった。田中氏はとりわけ、近世日本の集約稲作の特長として、さまざまな農業技術が急速かつ広範に伝播した点や、各作業の熟練者を尊ぶ気風があったことなどを指摘した。

討論では、ディスカッサントのテー氏がそれぞれの報告者に対して個別の質問を行い、続いて同じくディスカッサントの杉原氏が、東・東南アジア地域内の農業システムの比較をする前提として、それらが全体としてはヨーロッパ型農業システムのモデルに対するオルタナティブの発展径路を示していることを意識するべきではないかと述べた。

(RA 石坂晋哉)



左から、テー氏、杉原氏、中林氏、藤田氏、田中氏▲

◆セッション3

南・東南アジアの水資源をめぐる紛争解決



パラニサーミ氏▲

同時に、現在南インドでは、機能不全に陥った溜池を耕地に転換し土地なし層に分配すべきかどうかをめぐって論争が起こっていることを紹介した。中村氏は、スリランカ、南インド、カンボジア、

「悲鳴をあげる水資源」と題された第3セッションでは、南・東南アジアの水資源をめぐる紛争解決方法が議論された。

パラニサーミ氏は、南インドの溜池灌漑システムの劣化状況について概説したうえで、溜池の機能改善に向けた具体的提言を示すと

東北タイの貯水管理システムにみられる、持続的な水利用のためのさまざまな工夫や装置について論じた。例えば南インドでは、雨水をできるだけ多く溜池に貯水し繰り返し活用するため、溜池—用水路—圃場—排水路—溜池という連鎖や溜池同士の連関といったシス



石坂氏▲

テムが作られてきたと中村氏は指摘した。石坂氏は、北インドのテリリー・ダム反対運動を事例として、ガンディー主義的環境運動の特徴について論じた。石坂氏は、地元根ざした活動家であるガンディー主義者が、地元の共同体と都市部の活動家とを運動のなかで

つなげる役割を果たすと同時に、行脚や断食といった自他の「昇華」をめざす非暴力的戦術をつうじて紛争解決に貢献していると指摘した。

ディスカッサントの藤田氏はそれぞれの報告者に対し質問を行なったが、このうちパラニサーミ氏に対しては、溜池を耕地に転換すべきかどうかパラニサーミ氏自身の見解を尋ねた。それに対しパラニサーミ氏は、土壌の状態や投資コストなどを踏まえたいえで個別案件に即して対応すべきであるが、一番のポイントは共同体による管理システムをいかに構築するかだと述べた。

(RA 石坂晋哉)



中村氏▲

◆セッション4 地域（食料）資源に対する新技術・新システムの影響

第4セッションでは、新しい技術の食料資源に与える影響について討議した。

ミシガン州立大学のブッシュ氏は、近年の消費者志向を反映した巨大スーパーマーケットの拡大という小売市場の変化が、バイオ技術・輸送技術の発達やグローバルな基準の設置等の動きに連動していると述べた。他方、地元農業にマイナスとみなされがちな巨大スーパーの展開過程においても、地域の小規模食品生産に対するニッチな需要があり、地域農業の転換の機会として生かせるものであり、食料資源の地域性を強化することで環境保全を前提とした持続的発展を目指すことが重要であると主張した。

遺伝子組換え等の農業バイオ技術を食料増産の鍵とする一般的視点に対して、茨城大学の立川氏は、その技術的貢献は食料増産に関しては間接的であり、その技術規制も企業の戦略視点に基づいていると批判したうえで、食料供給の質的側面を重視し、地域の環境に適応した戦略的なニッチ・マネジメントによる地域農業の必要性を主張した。

日中の食料貿易構造の急速な変化に着目する新潟大学

の木南氏は、両国間の農業・食品産業の相互依存関係の強化過程で、中国では産業クラスターの形成が進み、これらの形成には日本企業の地域偏在的な直接投資が重要な役割を果たしたと指摘した。これらの直接投資が、中国の国内市場やアジア諸国を対象に広げている現状を示し、グローバル化に対応して変化する中国の地域農業の実態を明らかにした。

(河村能夫)



左から、北原氏、ブッシュ氏、木南氏、立川氏 ▲

◆セッション5 試練の石油経済

まず、テー氏（インドネシア科学院）は、石油ブームがインドネシア経済に与えた影響とその意味合いについて考察を試みた。テー氏は、インドネシア経済に対する1970年代の2つの石油ブームと1980年代初頭のポスト石油ブームの影響を詳細に明らかにした上で、これらの石油ブームの意味合いとして、インドネシア経済は外部性に対して脆弱である、との指摘を行った。

次に、杉原氏（京都大学）は、東アジア、中東、米国・欧州で形成される「オイル・トライアングル」について報告した。オイル・トライアングルは、30年以上の歳月を費やし形成されたもので、世界で最も多角的な問題解決のメカニズムをもつ。しかし近年、中国やインドは、西洋型金融市場への依存に対抗しているだけでなく、石油供給源の確保を多角的に展開しており、オイル・トライアングルにおける問題解決のメカニズムは試練を迎えている、と杉原氏は主張した。

最後に、鈴木氏（龍谷大学）は、ガソリンの代替燃料として注目されている、バイオエタノールについて報告を行った。企業は、ガソリンからバイオエタノールへと転換する

際、どのようなインセンティブにもとづいて決定を行っているのだろうか。鈴木氏は、「不確実下の投資モデル」を用いて、転換を決定するインセンティブを理論的に提示した。

討論者のラクシュマン氏（コロンボ大学）は、中国とインフレーションに関する質問等を行い、議論を大いに盛り上げた。また、フロアーからは、バイオエタノールの価格が決定される際に石油市場を考慮しなくてもよいのか等、多くの質問がなされた。

(PD 佐藤史郎)



左から、ラクシュマン氏、杉原氏、テー氏、鈴木氏 ▲

シンポジウムのプログラム

2008年2月23日(土)

開会の挨拶／長崎 暢子(龍谷大学アフラシア平和開発研究センター長)

歓迎の挨拶／若原 道昭(龍谷大学長)

主催責任者の挨拶／河村 能夫(龍谷大学)

「グローバル化する世界における豊かな農村の未来について」

基調講演／ノーマン アップホフ(コーネル大学)

「悲鳴をあげる土地・水資源—稲集約栽培法(SRI)が示唆するポストモダン農業の事例と可能性」

セッション1 アジアとアフリカにおける自然資源をめぐる紛争

司会／清水 耕介(龍谷大学)

討論／平島 成望(日本福祉大学)

N. シャンムガラトナム(ノルウェー生命科学大学)

「南スーダンにおける戦後開発と土地問題」

高橋 和夫(放送大学)

「イラクにとって石油は祝福か呪いか?」

セッション2 比較史的観点からみた資源管理

司会／濱下 武志

討論／テー キアン ウィー(インドネシア科学院)、杉原 薫(京都大学)

藤田 幸一(京都大学)

「小作農の世界・農業労働者の世界—日本とバングラデシュの農業構造の対比」

中林 真幸(大阪大学)

「日本の『転換点』に直面した小作契約下の農民経済」

田中 耕司(京都大学)

「モンスーン・アジアにおける土地・労働集約型農業システム—近代初期における水稻基盤農業の技術的発展の比較」

セッション3 悲鳴をあげる水資源

司会／N. シャンムガラトナム

討論／藤田 幸一

K. パラニサーミ(タミル・ナードゥ農業大学)

「南インドの溜池灌漑—水不足と管理戦略」

中村 尚司(龍谷大学)

「アジア型紛争解決モデルとしての貯水管理」

石坂 晋哉(龍谷大学アフラシア平和開発研究センター)

「『昇華』の政治—現代インドにおけるガーデンイー主義的環境運動」

2008年2月24日(日)

セッション4 地域(食料)資源に対する新技術・新システムの影響

司会／河村 能夫 討論／北原 淳(龍谷大学)

ローレンス ブッシュ(ミシガン州立大学)

「新技術、規格、地域食糧資源」

木南 莉莉(新潟大学)

「新技術・地域資源と産業クラスター」

立川 雅司(茨城大学)

「果たされていない約束?—地域食糧資源のための農業バイオテクノロジー」

セッション5 試練の石油経済

司会／小瀬一(龍谷大学)

討論／W. D. ラクシュマン(コロンボ大学)

杉原 薫(京都大学)

「東アジア、中東、世界経済—試練を迎えたオイル・トライアングル」

テー キアン ウィー(インドネシア科学院)

「インドネシア経済に対する1970年代における2つの石油ブームと1980年代初頭のポスト石油ブームの影響」

鈴木 智也(龍谷大学)

「ガソリンから代替燃料への転換の決定—リアル・オプション・モデルの枠組みから」

全体討論

司会／ボーリケント(龍谷大学)

中村 尚司、河村 能夫、北原 淳



第3回国際シンポジウムを終えて

日本人、外国人研究者や留学生など約50名の参加者は、地域的には東京から佐賀まで、職業的にも大学関係者からJICAやNPOの専門家までと、多様な広がりを見せた。シンポジウムの特徴は、歴史的視点と横断的分析視点のリンクと、グローバルなレベルからコミュニティのレベルまでの対象の広範さにあったが、参加者の中から「『資源と環境』のテーマから受ける一般的印象とは異なり、多面的なアプローチが展開された面白い試みであった」と言われたのは、主催者としては喜びであった(河村能夫)。



シンポジウム後の記念撮影▲

第2回 PD・RA 座談会

2008年5月8日、アフラシア平和開発研究センターにて、第2回PD・RA座談会が行われた。今回の座談会では、博士研究員（PD）のアイスンウヤル氏、リサーチ・アシスタント（RA）の石坂晋哉氏と渡邊暁子氏の3名に、アフラシアについて語ってもらった。

（司会：佐藤、A：アイスン、I：石坂、W：渡邊）

司会：まず、アフラシアで勤務されるようになった経緯について、教えてください。

A：私は2008年3月から勤務しています。アフラシアを知ったのは、「研究者人材データベース（JREC-IN）」のHPを通じてでした。そして、アフラシアのHPをみて、「アフラシアはわたしのためにある！」と思いました。なぜなら、アフラシアのプロジェクトの方法と学際的なアプローチが私の研究スタイルと全く同じではないかと考えたからです。

I：2005年8月から勤務しています。長崎先生と中村先生という、南アジア研究において新しい局面を切り拓いた先生が所属されているセンターは、とても魅力的でした。

W：2007年12月から勤務しています。フィリピンに留学中、加藤先生を通じてアフラシアのことを知りました。私の研究は、フィリピンにおける宗教や文化をめぐる紛争であるため、アフラシアの研究目的と方法に合致していると思い、応募いたしました。

司会：それでは、みなさんのご専門をご紹介していただけませんか。できれば、その専門とアフラシアでの仕事はどのような関連性をもっているのかについても、お願いいたします。

A：国際政治経済学を専攻しています。博士論文では、日本の東南アジアにおける経済連携協定（EPA）をめぐる外交について、理論的に考察しました。アフラシアでは、ASEANに焦点をあてて、同地域間の相互理解・協力を深化させるためにはどうすればよいのか、主として文化的な側面から考えていく予定です。

I：専攻は南アジア地域研究です。現代インドのガンディー主義と環境運動について、博士論文を提出いたしました。アフラシアでの勤務を通じて、2つの重要な視点を学ぶことができました。まずは、アジア・アフリカの在来知に注目する、という視点です。

たとえば、インドのガンディー主義者は、行脚や断食といった在来の非暴力的戦術を通じて紛争解決に取り組んでいます。2つめは、「紛争」には社会をより良い状態にもっていかうとする積極的な面がある、という視点です。環境運動は、環境と調和的な社会をめざす「紛争」だといえます。

W：私の専攻はフィリピン研究です。具体的には、ミンダナオ紛争によってマニラへの移動を余儀なくされ、現在は主に教育・経済的目的で移動してきているマイノリティーについて、博士論文を執筆しています。アフラシアでは、ムスリムの女性たちの中にあるコンフリクト、また、移動にもなって生じる異文化との葛藤や折り合いのつけかたについても考えていきたいと思っています。

司会：最後に、アフラシアの今後について、何かメッセージをお願いいたします。

A：他大学や研究所とのネットワークの構築、研究成果の情報発信を積極的に展開していけば、さらにアフラシアの宣伝になると思います。

I：龍大において蓄積された宗教研究をアフラシアでもっと活かして、紛争解決における宗教の役割等、ユニークな視点を提供できるのではないかと思います。それから、女性や外国人の研究者が生き生きとしているアフラシアは、日本のアカデミズムの状況に対して、大きな一石を投じているといえるのではないのでしょうか。

W：アフラシアの学際的な研究員の方々がお互いに比較することによって、個人間のもめごとや国家レベルの紛争までの多様なレベルのコンフリクトの解決に貢献できないかどうか、その展望をアフラシアでは見出せるのではないかと思います。

（PD 佐藤史郎）

中村先生が研究代表の科研費（基盤研究費B）が採択されました！

◆プロジェクト名

「移住労働者の人権擁護システムの構築を目指す研究—スリランカの事例を手がかりに—」

◆期間

2008～2010年

◆目的

- (1) スリランカの事例を手がかりに、移住労働者の「契約奴隷化」を防ぐ人権擁護システムを構築する。
- (2) 移住者への差別、偏見、社会的排除及び虐待をなくし、受け入れ側住民との共生社会実現のために必要な施策を提言する。

*プロジェクトには、カルロス先生（事務局長）と酒井先生（1班）が共同研究員として参加されています。



左から、アイスン氏、石坂氏、渡邊氏▲

研究会リスト (敬称略)

■ 2007年12月7日 / 第4班研究会

佐川徹「東アフリカ牧畜民の敵対と友好—民族間の境界形成と流動化の過程に注目して」
舟橋和夫「東北タイ農村ドンデン村における村落経済構造—Moral Economy・Political Economy 論争を手がかりに」

■ 2008年1月25日 / 第1班研究会

岩谷彩子「改宗を支える夢見—南インドの移動民社会をとりまく宗教対立と融和の諸相」
長崎暢子「インド国民軍日本人関係者の聞き書き—第二次大戦における日印関係の一側面」

■ 2008年2月2日 / 第2班研究会

知足章宏「中国における流域レベルの水汚染物質排出許可証取引制度—上海モデルの意義と課題」
李態妍「Can the Clean Development Mechanism Really Contribute to Achieving Sustainable Development in Host Countries?」

■ 2008年2月9日 / 第2班 SGSD 研究会

石坂晋哉「Politics of 'Sublimation': The Gandhian Environmental Movement in Contemporary India」
Muhammad Arsyad「Agriculture in Indonesian Economy: Policy Impact Issues and Future Work for Poverty Reduction」

■ 2008年2月23日、24日 / アフラシア第3回国際シンポジウム

「Resources under Stress: Sustainability of the Local Community in Asia and Africa」

Norman Uphoff, N. Shanmugaratnam, 長崎暢子, ポーリン・ケント, 高橋和夫, 平島成望, 藤田幸一, 中林真幸, 田中耕司, K. Palanisami, 中村尚司, Thee Kian Wie, 杉原薫, 石坂晋哉, 藤田幸一, 河村能夫, 清水耕介, 濱下武志, Lawrence Busch, 木南莉莉, 立川雅司, 北原淳, 小瀬一, 鈴木智也, W. D. Lakshman

■ 2008年3月29日 / 第2班研究会

樋本淳也「インドネシア『不法』占拠農園における土地紛争—中ジャワ州バギラン株式会社 (PT Pagilaran) 農園の事例」

■ 2008年4月25日 / 第1班研究会

佐野東生「イラン・ナショナリズムとタキーザーデーアゼルバイジャン分離問題をめぐって」

■ 2008年4月26日 / 第2班研究会

山中大輔「日系ブラジル人の『定住化』をめぐる議論と『反復出稼ぎ』」

■ 2008年4月26日 / 第4班研究会

渡邊暁子「フィリピンの都市におけるムスリム・マイノリティの土地紛争」

■ 2008年5月10日 / 第3班研究会

石塚勝美「国連 PKO と平和構築—国際社会における東ティモールへの対応」
松井智子「移民経験をめぐる語りとそのリアリティー—タイ人帰国者のライフヒストリーから」

■ 2008年5月17日 / 第2班研究会

Peter Little「Can Development Occur in a Protracted Political and Security Crisis: The Case of Southern Somalia」

刊行物

《Working Paper Series》

No.33 Pauline Kent, *The Chrysanthemum and the Sword: The Use of Radical Comparisons to Enhance Mutual Understanding*

No.34 Naomi Hosoda, *Towards a Cultural Interpretation of Migration in the Philippines: Focusing on Value-Rationality and Capitalism*

《Afrasia Symposium Series》

No. 2 Proceedings of the Second Afrasian International Symposium

Changing Identities and Networks in the Globalising World: Negotiation, Conflict Prevention and Conflict Resolution in Everyday Life, 23 February 2007, Monash University (Melbourne, Australia). Edited by Takeshi Hamashita, Pauline Kent, Ayako Iwatani and Aysun Uyar.

その他の刊行物については本研究センターのウェブサイトをご覧ください。http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/

第4回アフラシア国際シンポジウムのご案内

本研究センターは、2008年度国際シンポジウムを以下の要領で開催いたします。

開催期日：2008年11月15(土)～16日(日)

開催場所：龍谷大学大宮学舎 清和館3階

テーマ：The Question of Poverty and Development in Conflict and Conflict Resolution
(紛争と紛争解決における貧困ならびに開発という問題)

趣旨：この2、30年、地球上には環境の劣化と温暖化という大きな変化が進行中であり、さらにこれに一部連動して、最近では原油と食糧価格が高騰し、貧困や格差の拡大が益々深刻度を増しています。貧困や格差の削減とともに将来的な資源争奪の回避を含め、どのような援助や開発が必要とされるかが、現在、喫緊の問題となっています。このような現況を背景としながら、本シンポジウムでは歴史的時間幅を長くとり、貧困と開発が紛争や紛争解決とどのように関係してきたか、そして現在どのように関係しているのかについて、アフラシアのうちとくに東南アジア、南アジア、アフリカでのフィールドワークの経験が豊富な研究者、活動家と共に検討します。

アフラシア・センターの新リーフレット

アフラシア・センターの新しいリーフレットができました。



日本語版



英語版

アフラシア ニュースレター 第6号 2008年7月

発行／龍谷大学アフラシア平和開発研究センター

〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5 TEL/FAX 077-544-7173 http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/

編集／マイケル ファーマノフスキー、佐藤史郎、アイスン ウヤル、石坂晋哉

印刷／株式会社 田中プリント